

---

○議長（藤井 要君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午前 9時30分）

---

○議長（藤井 要君） 一般質問の前に申し上げます。質疑、答弁は的確にわかり易く、要領良く行ってください。通告以外の質疑はできません。また、関連質疑は議長の許可を受け質疑を続けてください。

質疑は一括質疑と一問一答方式どちらかを述べてから質疑に入ってください。

それから、固有名詞等は発言に十分注意してください。

なお、本定例会において、町長に反問権を付与します。反問権を行使する場合は、反問の趣旨、内容を示し議長の許可を得てから行ってください。

最後に、傍聴者に申し上げます。議場内ではお静かにお願いいたします。

---

◎一般質問

○議長（藤井 要君） 日程第5、一般質問を行います。

質問の通告がありますので、順次発言を許します。

---

◇ 高 柳 孝 博 君

○議長（藤井 要君） 通告順位1番、高柳孝博君。

（7番 高柳孝博君 登壇）

○7番（高柳孝博君） 通告に基づき、壇上より質問いたします。今年は振り返って見ると、日本は大きな災害が多かったと思います。昔は、災害は忘れた頃にやって来るといわれましたが、今は、災害が次から次へとやって来る、本当にそう思います。しかも、急に来る。短時間の大雨は、今までの防災の考えをワンランク上げなければならないと考えます。堤防を超えてくるかもしれません、避難時期を早める、河川の危険水域の設定を下げるなどは、すぐに変えられます。備蓄も見直しが必要かと思います。テレビなどを見ますと、ゴムボートや水に浮く自動車なども、今後、必要となるかもしれません。災害に遭われた方の早い回復と今後の対策を希望いたします。

一般質問に当たり、私が公約として掲げた、見通しの明るい町づくりを目指して、1つは福祉の充実、2つ目は仕事づくり、3つ目が新技術の活用と現況を比較いたしますと、まだまだ

やらなければならないことが沢山あると思います。それは町の掲げている、花とロマンの里に通じる満足度の高い町づくりと共通するところがあると思います。弓的的に例えれば、良い射手と弓矢、そして当てようとする的がはっきり見えている必要があると考えます。吹き矢では、真ん中の黒い点を凶星というそうです。まあ、凶星まで行かなくても、そのまわりを当てるところから近づけたらと思います。

町は、松崎町第5次総合計画や松崎町過疎地域自立促進計画の基に、三聖苑、道の駅パーク構想も新たに\*\*\*\*と受け止めます。県も駿河湾フェリーの新航路として松崎も検討されており、できれば今年度中に試行運転をしたいとしています。未来を明るくするには、更に考えることがあると思います。交流人口、定住人口を増やすためには、到達点が需要に達すだけでは、必要条件であっても十分条件たり得ないとも考えています。かといって、人口が減っていくのは見えていますから、現在の地方自治体は、人口減少を食い止める努力よりも、継続することと効率性を目指す・・そういう方がいらっしゃいます。何もしなければ消滅する町といわれれば、まさにそのとおりでしょう。継続のためには、需要を守るだけでも人口減少の下では減っていくばかりです。需要を増やす施策を続けてこそ、継続はできるのではないのでしょうか。最初に需要の確保を行い、実需に沿って実行する事業の規模を最適化する、また、将来を考えれば、町を担う世代の教育はとても大切です。そこで、町の継続のための施策と業務の効率化、未来を担う人材育成に向けての質問をいたします。

1つは、まち・ひと・しごと創生総合戦略の取り組みについてであります。施策の評価について、テーマごとに施策が進められているか、結果目標への貢献度をどう見ているか、施策は結果と結びついているか、町政が向上しているとは思えない。人口減少対策、経済の活性化をどう評価するか。更なる施策の取り組みについて、町の再興に向けて、更なる自立促進政策をどう考えるか。国は新たな社会ソサエティ5.0により、社会的課題を解決していくとしています。町として検討していく考えはあるかであります。

2つ目は、道の駅パーク構想について、交流・定住人口を増やすには、儲かる仕組み作りが必要であるがどう考えるか。1つは6次産業化の目指す質と量をどうするかであります。メニューの差別化、日本一づくりで、外部の評価が伴わなければならないが、その施策をどう考えるか。

3つ目は、学校のプログラミング教育についてであります。現在の取り組みはどのようなものか、今後の取り組みと目標をどのようなものか。

以上、壇上からの質問を終わります。

(町長 長嶋精一君 登壇)

○町長(長嶋精一君) 高柳孝博議員の質問にお答えいたします。まず、始めに大きな1つ、まち・ひと・しごと創生総合戦略の取組みについて、その内に1つ目、結果目標への貢献度をどう見ているか。2つ目には、町の勢いが向上しているとは思えない。人口減少対策、経済の活性化をどう、評価しているのかということでございます。

総合戦略では、平成27年度から平成31年度までの5カ年で施策ごとに数値目標を設定し、事業を進め、毎年その達成状況は、役場組織を横断する各課長出席の庁内会議及び産官学金労で組織する「松崎町日本で最も美しい村推進委員会」で評価検証をしております。総合戦略で町が目標とした人口と現時点での人口推移を見ますと、必ずしも現状の対策が十分機能しているとは言えない面もあると思います。町としましては、人口減少を抑制するために、移住定住対策、子育て支援事業、町内で仕事ができる環境づくりなど町独自の事業も行っており、転入から転出を差し引いた社会減は年々マイナス幅が小さくなっております。これらの施策により、すぐに人口の自然増・社会増に結びつくことは大変厳しいと思いますが、人口減少抑制のための環境整備に全力で取り組んでまいります。

大きな1つ目、まち・ひと・しごと創生の内の1つ目であります。町の再興に向けて、更なる自立促進対策をどう考えるかという質問でございます。先ほども申し上げましたとおり、現状の対策が必ずしも機能しているとは言えないと感じております。そのうえで、本年度策定する総合戦略では、これまでのように総花的ではなく実現可能な事業について、実施年度や財源、実施体制を勘案しながら重点化を図り、優先順位を付けて実施してまいりたいと思います。定住人口を増やすことは、総合戦略の計画期間である5年で解決するものではなく、長期にわたり継続した取り組みが必要となります。一方で、交流人口を増やし町の活性化につなげていきたいと考えています。

続いて同じく大きな、まち・ひと・しごとの中の2つめ、国の新たな社会ソサエティ5.0により社会的課題を解決して行くとしているが、町としても検討していく考えはあるかという質問でございます。ソサエティ5.0は、第5期科学技術基本計画において、国が目指すべき未来社会の姿として提唱されました。具体的には、ICTやAI、ドローン、自動走行車などの活用を推進していこうというもので、実際先日まで松崎町で自動運転の実証実験を行い、新技術の実用に向けての第一歩となりました。第2期総合戦略において国が示した基本方針では、新たな視点を踏まえて施策の検討を行うことが重要であると示され、その中でソサエティ5.0の実現に向けた技術の活用が明記されています。町にとって、実現可能な具体的な計画

が出てきましたら総合戦略や総合計画実施計画の見直しの中で検討してまいりたいと考えております。

次に大きな2つ目、道の駅パーク構想でございます。その内の1つ、儲かる仕組み作りが必要であるがどう考えるか。6次産業化の目指す質と量をどうするかというご質問でございます。お答えします。道の駅パーク構想では、交流人口の拡大、地場産業の振興及び住民所得の増加、松崎町の歴史文化を発信する目的で町民を始め多くの皆さんが関わり検討し基本計画を策定してまいりました。地域経済の活性化を図る上で交流人口を増やすことは大変重要であり、賑わいを創り出すことにより消費につながり、それが所得の増となり、また地域内で消費するという地域内経済循環を作り出していくことであると思います。所得を増やすためには、他にはない魅力的な商品を作りだし、販売することが重要であり、異業種と連携した6次産業化による商品開発を積極的に進めることにより品質や販売量の確保に努めてまいりたいと考えております。

大きな2つ目、道の駅パーク構想のうちの2つであります。交流・定住人口を増やすには、儲かる仕組みが必要であると。それからメニューの差別化、日本一づくりで外部の評価が伴わなければならないが、その施策をどう考えるかという質問でございます。お答えします。町の特産品としては、松崎ブランド創出展開支援事業により、地域の新たな特産品開発や販路開拓を進めており、現在36品目の松崎ブランドが認定されております。議員ご質問のとおり、松崎ブランドや町の特産品が広く町内外に認知されることは重要であり、商工会を中心にプロモーションを行っております。松崎ブランドなどの特産品開発にあたっては、町や商工会に加え、観光協会、JA、金融機関などで組織する体制を作り、産業関係者一体となって進めております。外部の評価につきましては、食のイベントなどの参加の際に、接客を通して商品についての感想を伺ったり、また、お客様の反応を見ておりますが、マーケティングの専門家などに個別の評価をいただいているわけではございませんので、今後、商工会の松崎ブランド認定委員会とも協議してまいりたいと思っております。次に3、教育についてでございます。これは、教育長より回答したいと思います。

(教育長 佐藤みつほ君 登壇)

○教育長(佐藤みつほ君) はい、それでは、引き続き、お願いいたします。3、プログラミング教育についてであります。現在の取り組みはどのようなものですか。今後の取り組みと目標はどのようなものですかということにお答えしたいと思います。

新学習指導要領に基づき、2020年度からプログラミング教育がすべての小学校において必修

化されます。松崎町では、来年度に向けて新しいパソコンのリース並びに電子教科書などの環境整備を新年度予算で計上すべく準備しております。小学校におけるプログラミング教育とは3点あります。1点目「プログラミング的思考」を育むことです。2点目「プログラムの動きやよさ、情報社会がコンピュータ等の情報技術によって支えられていることなどに気付くことができるようにするとともに、コンピュータ等を上手に利用して身近な問題を解決したり、よりよい社会を築いたりしようとする態度を育むこと」です。3点目「各教科等の内容を指導する中で実施する場合には、各教科等での学びをより確実なものにすること」など3点を狙いとしております。プログラミングの技能を習得することのみの目的としてはおりません。松崎町では、子供たちに、コンピュータに意図した処理を行うよう指示することができるということを体験させながら、発達の段階に即して、資質・能力の育成を図ってまいりたいと思います。

○7番（高柳孝博君） 一問一答でお願いいたします。

○議長（藤井 要君） 許可します。

○7番（高柳孝博君） まず、まち・ひと・しごと創生総合戦略のところですが、結果目標という話をしている訳ですけれども、今後の計画の中で、自治体の継続と効率化ということを言われているわけですね。今まで、人口減少を止める、止めるとやってきたわけですが、なかなか今の人口構成からみますと、当然これからも減っていくことが考えられます。その中で、減っていく中で、需要を考えて事業をやろうとすると、人口が減ると共に事業も減らなければいけない。そういうことのスパイラル、マイナスの負のスパイラルに陥る可能性があるので、そうではなくて、需要のためにある仕事と、需要を増やすためにする業務と分けていくことが1つは必要ではないかと思います。それから需要の話と、業務を効率化するということですね。業務を効率化するに当たっては、私は、いよいよ新技術・・・行政においてもICTを活用していく。その他、いろいろな情報の共用化、それから業務自体の見直し、そういったことも、今後、求められるのではないかと思います。特に、人口が減っていく中では、役場の職員の方もなかなか大変少ない中で、やって行かなければいけませんので、効率化が進めば少ない数の中でも良い仕事ができる、そういうふうに考えますので、分けて考えるってことと、効率化の話、それから上手くいかなかった時には、もう引き上げる。いろいろな町の業務としては補助金の提供、もう一つは条例等法案の・・・緩くする、厳しくする、そういった業務があると思いますけれど、一旦、補助金を与えちゃうと、その補助金によって3年間なら3年間やっちゃう。そうすると、その事業が上手く行かなくても、更に補助金をつぎ込まなければ継続できないということが・・・、まあ、そういうことは無いと思いますけれど、そこはやっぱり、予め

こういう状況の時には撤退する、引いて行く、そういったことも考えての計画を立てる必要があると思います。その辺りいかがでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） まず、総合戦略の方で高柳議員の方から、需要を増やすため、もう1つは効率化ということでありました。やはり需要を増やすということにおいては、やはり牌を増やすということで、人口というのがひとつのキーワードがあるわけですが、定住人口としての増加というのは非常に難しいということは、町長申し上げたとおりです。ただ一方で交流人口というのは、ここは増やすという余地は・・・、要するに余地というのは、まだまだ、あるのかなと一方で思っています。ですから、そういったところでの需要創出は出来るのかなということで、それは今、道の駅でやってるわけですので、それは1つの交流人口の増加という目的でありますので、そういったことも需要を増やすための一つの政策であるということだと思っております。もう1つ、効率化ということでありましたけれども、こちらはやはり、先ほどのソサエティ5.0、新技術ということで、今後、自動運転ですとか、そういったことが1つの効率化になる、1つの要素になるのかなと思います。そういったことも含めまして、今後、国の方でそういった施策が示されますので、町としても実現可能な計画が出てきたら、そこは実施計画の中で検討してまいるといことで考えております。

○7番（高柳孝博君） 計画は・・・もっとわかりやすく言うと、保育所の人足りているかどうかというの、人口が減っていく中で、保育を受ける・・・サービスを受ける側は減っていくわけですね、そうすると、減っていく需要に併せて施策っていうのは、当然足りているか・・・施設が足りているかというのはある。一方、需要を増やそうかすると、その保育が・・・例えば近隣の町より、松崎に行くとうごい保育ができるよっていうと、来ていただける可能性があるわけですね。そういったところが、本当に需要を増やすところの策だと思います。そのところは、やっぱり最低でも需要を満たすっていうことは最低必要条件であって、それ以上増やすことではなくて、増やすための策、それは他のこともそうだと思います。そのところをきちんと施策の中で考えていく。まあ役場で・・・先ほど申し上げたように、執行側がやる業務っていうのは、補助金をやるとか、\*\*\*\*\*若干は手伝うかもしれませんが、実行するのは民間でやらなければならない。民間が元気にならないと、みんな創生失敗している訳です。行政が一生懸命頑張っても、補助金が切れた時点で止まってくというのがかなりあります。全国で地方創生やっても、成功したのは4割以下ですので、かなりこれは難しい。だけど、そのところを分けて、需要を増やすっていうことを是非やっていただいて、それが今度、計画を立てる時にしっかりと分けて・・・幸い重点施策ということで、それも1つの需要を増やすことだ

と思っていますので、交流人口、定住についても更にやる必要があるんじゃないかと、その辺りいかがでしょうか。

○町長（長嶋精一君） 高柳議員がおっしゃるように、人口は日本全体ですずっと減っているわけですから、松崎町だけが増えて行くということはありません。そういう中で、人口が減って行って、松崎町の役場の体制がずっと同じということはありません。やはり人口は減っている・・・町の職員もやっぱり、高柳議員のおっしゃったようなICTと、そういった色々な効率的な物を使いながらね、やっぱり、ある程度は減らして行かないとやっつけていけなくなるというふうに思います。人口が減るということは町税・・・税金が減ることです。税金が減って、じゃあ人件費が増えていったら、町は破綻してしまいます。従って、それは、すぐにやるわけではないですけど効率化を考える。今、おっしゃられたように、業務の見直しをやる。これは町がやらなければいけない仕事なのかというのをしっかり確認しながらやっつけて行かないと、後々続く人たちにツケを残すという形になります。従ってそこら辺は、シビアにやっつけて行かなければいけないかなというふうに思います。

そして、需要を起こすということは、民間企業でなければ難しいんですね。というのは、民間企業は、それをやっつけて行かないと飯が食えないというのがあり得るわけです。ところが、残念ながら我々は、安定収入があるということは、なかなか需要を見つけるのは難しいのだけれども、その中でやっていることは、道の駅に直売所を作ろうじゃないか、そこで需要を喚起しようじゃないか。それと桜葉については・・・桜葉自体には需要が旺盛であると、ただ供給体制が追いついていかないということにネックがあるわけですから、そこら辺は、しっかり供給体制を構築しながらね、やっつけて行こうと思っています。イノベーションを起こさなければいけないと思います。これは、高柳議員と一致した考えでございます。イノベーションは別に、製造業とかね、科学技術で使う言葉じゃありません。これはサービス産業でも、町でもできるわけがあります。シュンペーターという人が唱えた経済論理がありますが、\*\*は新結合、前々あった部分に対して新しい物を付け加えていく、これはイノベーションであります。私はそれを追求していきたいなと思っています。是非、高柳議員からも色々なアドバイスをいただきたいというふうに思います。

○7番（高柳孝博君） 時間がどんどん進んでいっちゃうので、次に行きたいと思います。

民間活力に向けて、1つ有効な手段としまして、地域おこし協力隊というのがあります。その方たちが町に来て、事業をして定住する。そういうことを目的に来ていると思いますので、まさに町の人口対策、そして、町の民間企業の活力を活かすための火種っていうんですかね、

\*\*を入れていただく、そういう役割があると思います。その当たりで、地域おこし協力隊の方にどんなことをテーマとして、町で起業して欲しいということのテーマを与えたのか。それから、今年抜けていく人たちが、どうゆうところに起業に・・・本当に定住になっているのかどうか。これから抜けていく人があるから結果的には出ないわけですけど、今どんなことを進めているか。ちょっと簡単をお願いします。

○企画観光課長（高橋良延君） 協力隊員を募集するに当たりましては、町で募集要項を作成いたしまして活動内容について明記しております。いわゆる、協力隊員に自由に任せるということではなくて町のミッションを提示いたしまして、それに取り組んでいただける地域おこし協力隊員にこちらに来てもらっています。今までも棚田の保全、あるいは桜葉の関係とか、木工とか、そういったところで協力隊員やっております。来年3月に3名、任期満了となります。その方々については、木工のものづくりをやっている2人の協力隊員については、引き続き町内で木工塾の運営を行って行くということで、ここに・・・いわゆる定住しながら木工塾の運営をやって行くことで検討しているということでもありますので、ここに残ってもらえるような形で今、考えていると。でもう一ついいますと、今までに任期満了で4名の方が協力隊員で卒業いたしました。その内の3名は松崎町に定住しております。そのことは申し上げます。

○7番（高柳孝博君） 仕事はいろいろ、松崎の課題というのがあるって、松崎としてはこういうところを活かして欲しいというテーマをあげて、実際にそれが本当に、そこで起業になっているのか、起業するためには先ほど申し上げましたように、儲けがなければ大体、3年くらい経つと居なくなっちゃう・・・企業は一般的に5年くらいは黒字でもしょうがないから頑張ろうということだと思いますので、その当たり是非、町で何処までサポートできるかっていうのは、最初の目的が町で定住してもらう、町の活力に働いてもらうということですので、それが本当にうまくいっているか見ていく必要があると思います。それから、これから入ってくる技術に対して、出てきたら考えるのではなくて、国の施策というものは出して、どこか手を挙げないかと言ってくるわけですね。そのとき手を上げていないと来ないんです。だから、そこを早く考えて新しい社会、新しい技術を松崎としてどう使えるかを、まず自分たちが考えを作って、国が出てきたらお待たせしました、こういうのを出して下さいって言ったらすぐ出るようにしないと、出てこないものはエントリーしないものは検討しませんので、前の依田町長の話、たびたびしますが、そのときには国の施策にあらゆるものに提案していた。中央の方に松崎町ってなんだっていうのが有名だったと言われて、今も昔のことを言う方もいらっしゃるようですが、そこを是非お願いしたい。ここはいかがですか。



○企画観光課長（高橋良延君） まさに、新技術に乗り遅れないように、やはり我々もアンテナを高くして率先して、先取りして、そのこのところは取り入れて行きたいと思っております。

○7番（高柳孝博君） 先ほど、町内とか、いろいろな団体の方といろいろな検討をしているということでしたので、そのあたりは、是非企画書ベースくらいにして、町として何ができるのか、何ができないかというのをちょっと検討していく必要があると思います。次、行きたいと思えますけれど、時間が無くなってきたので、飛ばしますけれど、例えば、資源の使い方についても、活性化において、先ほど松崎ブランドは、36ブランドあるということでしたけれど、それらが本当に町の町内で、まず使っているかどうか、松崎町なんかでも本当にそれを売り込んでいっているのかとかですね、いろんなことが考えられると思います。良く出ているのは、あそこに何かを食べに行きたい、食べるために行くなんていうのは、もう、町の人に聞くと、この町で食べたいものはなんですかって言うとズバって出てくるわけですね。そういうふうにならないと町の人も分からないのに、外の人に売り込もうとしても、これはちょっと無理があるのかなということをおもいます。ただ、ブランド化という場合には、やはり、ここに来なければ食べられない、そこまで行かないと本当の交流の人口の増に繋がらないのではないかと思います。その辺りいかがでしょうか。簡単をお願いします。

○企画観光課長（高橋良延君） やはりそのこのところは、商工会を中心にプロモーションを行っております、そのこのプロモーション不足っていうのは否めないということで思っています。まあ、チームは作っておりますので、そのこのところは機能できるようにしてまいります。

○7番（高柳孝博君） あとは、町の資源ですね。町の資源が、本当に森林とか農地とか、温泉なんかも実際には余っているわけですので、温泉なんかをどう使うのか。それから空き家などの・・・空き家を使えるような状態で提供しているかどうかなんですよね。空き家を使っているところは、河津だったかな・・・単純に体験してみるところ、あるいは短期、一週間くらい体験する。あるいは、長期に体験してもらって、良ければ住んでもらう。それくらいのところをやってる・・・この町はやっているんでしょうか、いかがでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） お試しの移住の体験については、町内で一軒ございます。

○7番（高柳孝博君） あと、森林なんか・・・実際には民間がやるからいい話なんだけれど、本当に森林が活用されている森林がどれだけあって、これから活用できる森林がどれだけあるかっていうのは、データのやっぱり把握していると施策も違うんじゃないかと。まあ、後継者の育成っていうのも大事ですけど、肝心の資源っていうのは森林があるのかどうかっていうのが、ここが分からなければできないと思います。それから農業のおいても、本当の農業

は・・・何割かは休耕田になっておりますけれど、休耕田になっているだけでそれが使えるかが問題であって、その辺りはデータとして掴まれているか、その辺りいかがでしょうか。

○産業建設課長（糸川成人君） 森林の活用につきましては、森林環境譲与税が今年度から来ますので、その中で町内の全体的把握を今年度して、来年度以降も調査をしていくような、段階的に計画をしております。また、休耕田につきましても、現況調査ということで毎年実施をしております、来年か再来年あたりにですね、利用の意向調査を実施をしたいということで、計画をしているところです。

○7番（高柳孝博君） データというのは非常に大事だと思います。こういう使えるのがあるから、これを使ってみませんか、外に来てもらうには、例えば交流にしても、定住にしても来てもらうには、これだけ我が町で使えるから来て下さいってやらないと、来る人って・・・何も分からないまま来るというのは非常に酷な話なので、そこを考えていただきたいと思います。特に温泉なんかはね、まだ少し、若干余裕があるようです。今まで使っていた温泉が使わない人が増えてきている、ということは余っている温泉がありますので、その活用等を含めて、地域おこし協力隊の人が来るのかは分かりませんが、それで何か、これを使うアイデア募集でも良いですけど、何かやって、外部の力を借りて、使うようにするっていうのも一つの手だと思います。その辺りいかがでしょうか。

○統括課長（高木和彦君） 今、短い時間にですね、たくさんの施策の案をいただきました。私も聞いておまして、今までも、漠然とするのではなくて、前向きな行政をしていくというご指導だと思います。その辺につきましても、本当にいろいろな提案いただきましたので、参考にしながら進めていきたいというふうに考えております。

○7番（高柳孝博君） 時間が無くなっているんで、次に行きたいと思うわけですけど、もう一つソサエティ5.0というのが・・・国の方は、色んな人が、人口減少が、働く人が減ってくる。あるいは、これから新しい技術がどんどん入ってくる。既に通信の世界では、第5世代の5Gという時代を飛び越して、6Gの世代を検討しています。実際に中国なんかそういう白書を出しているようでもありますので、そうすると5Gの100倍くらいの通信速度って言うので、かなり別のことができる。今と違った、全く考えられないことが出てくるというふうに考えます。その辺りで今後考えて行く必要があるんじゃないかと、自治体としてまず1つは、どういうことを使えるか。自動運転もですね、この前試乗させていただきましたけれど、まだまだリアルタイムに運転がきるといように思えなくて、センサーの状況・・・まだ、現在の状況は、データを予め入れておいてそこを走る。でもそれだと、未知のところは走れないわ

けですよね。そこの会社の方には言っておきましたけれど、現在の状況をセンサーで把握して、それで判断して、ここ行けるのか行けないのか、向こうから車が来ていたら止まるとか、そういうプログラムにしないとちょっと使えないのかなと。松崎町の中をもう一回走ってみてくれて言ったら、このコースしかデータが入っていないから走れないと。それだと使えないので、是非町長も先ほど自動運転の話も出まして、まさに、今、タクシーとかバス券とか出して、お使いとか医療の足に使っているわけですけど、そうではなくて、本当に安全なそんな物ができてきたらですね、お迎えに来て乗っけてもらって来る。そうしないと、なかなか今後、タクシーで来ても、じゃあタクシーが待っている、医療が終わるまで待ってて、乗っけてくれなかったら・・・まあ、タクシーの業務になりませんから、来ても、すぐ来ないとか、そういうことが起きてくるとまずいので、その当たりもいろいろ今後、考える課題かと思えます。

それから自治体の方も、効率化の中で、ソサエティ5.0もそういうのをいっぱい考えて出てきますので、先ほどアンテナを高くするって話もありますけれど、まず国が予算を付けてきますからね、国が予算を付けて県へと来て、町へと来ると思えます。町は当然、所得税だけでは食っていきませんので、その辺りは国がどういうことをやっているか。国も地方創生をやっていて、必死でやっているんですよね。成功させるのにどうしたら良いのか・・・実は4割以下だと、これは本当に地方創生できるのかなと疑問がつくわけですよね。だから事前に考えるということ、例えばビックデータとかICTをどう使えるか、町のビックデータとして何があるのか、その辺りいろいろ・・・研究者もいろいろやっていますので、是非検討していただきたいと思えます。それから、町の中の・・・。

○議長（藤井 要君） 高柳議員、大きくじゃなくて、もう少し細かく、町が答えられるような質問をお願いします。

○7番（高柳孝博君） 例えば、効率化でですね、電話会議とかテレビ会議、それから防災への応用、それから地区に端末を置いてネットワークで業務をやるとかですね、そんなことも行政の中では将来考えるだろう、その辺りどう考えますか。

○町長（長嶋精一君） 具体的な答えになるかどうかちょっと分かりませんが、高柳議員のおっしゃった、ソサエティ5.0のうちの1つはですね、科学技術がこれからもっともっと進化するという、これをどういうふうに我々が取り組んで行くかということと、もう1つは、アナログ世界、これをどういうふうにやっていくかという、2つを棲み分けて行かなければいけないと思えます。だから、新しい物を・・・科学技術の新しい物をICTは使って行く。それは

僕は、町のその役場の組織の中で活用できると思います。これは積極的に取り入れたい。

ところが、町民の皆さんに対しては、あくまでもアナログと考えています。ぬくもりのある感触のいい・・・そういったものを考えて行かなければ、松崎町の独自性っていうこれはできていけないと思います。従って、科学技術とアナログの世界をうまく使いながら、科学技術といっても、科学技術に使われてしまわないように、活用していくということを考えるということです。従って、国、県の施策については、鋭敏に我々は対応していきたいなと思っています。高柳議員のおっしゃるとおり、そったく同時という言葉があるんですけどね。卵の中の雛がもう外に出たいとって、殻の中からつつくのと、国とか県が・・・母鳥がですね、お前もう出てくるぞというのが同時であるというのが成功の私は秘訣だと思います。従って、我々が卵の雛とすると、我々がつつかなければいけないんですよね、そういうふうにしていきたいなと思います。

非常に高度な考えを高柳議員お持ちですから私もはっきり言って、科学技術には若干疎いと思われるから、また、教えて頂きながら、当局と一緒にやって行きたいなと思います。よろしくをお願いします。

○7番（高柳孝博君） 今の話は、アナログって話がありましたけれど、新技術を取り入れると同時に、地元にある伝統文化、これをどう残していくのかということもありますよね。先般3Dのスキヤナを使って、長八作品をデータ化できないかという試みをしました。これは、企画観光の方も来ていただいて、メーカーさんに来ていただいて、デモンストレーションをやっていただきました。例えば長八作品が無くなったとしても、データがしっかりあれば復元も可能となるわけです。その当たりも新技術の使い方がある。それから、勉三さん、昔から作った、本田正観から延々と繋がる教育の流れの中で、町がどんな・・・例えば、依田勉三さんが、学校を作ったとか、生糸をやった、あるいは炭の産業が盛んで財をなしたとか、そういったことがちゃんと、自分たちも学校の時はそういうのをちゃんと教えていただけませんでしたよね。そういったこと、本当に、やっぱり町民も、私たちの町には素晴らしい、そういう文化、歴史があるんだと、そこはやっぱり売り込むというのは、まだまだあるんじゃないかと、そこを是非・・・これは今後のことですので答弁は求めませんが、やっぱりその、元々のところと新技術のところ、これをどうバランスを取っていくかというのは大事だと思いますのでお願いします。

続いて教育の方に入りたいと思いますけれど、プログラムの体験ですけど、先ほど確かにプログラムという話が・・・プログラムを作ることが目的ではないんですよね、考え方が大事で

あって、例えばこれから、コミュニケーションをとるにあたって、何々をしようじゃなくて、何々だからしようという、そういう発想が求められているからです。まあ、そういうことを言っていますので実際に、今後の中では、2017年に学習指導要領が改正されて、K12からK16になったんですかね。だから今まで、高校まで12年ですかね・・・、その上の16、大学までをその科学に進む分野であるとか、スティーブっていうんですかね、科学とかエンジニアリングとか、数学系へ進むとかアークへ進むとかいう話で出ているわけで、そうするとこれからはタブレットなんかが出てくる話ですので、その当たりをどう使って行くのかということなんですけど、まあ、プログラムとか、考え方を育成するということですので、私は1つ体験が必要ではないかと思います。体験をどうさせるかっていうところを何かそういう考えがありましたら、どうぞ・・・。

○教育委員会事務局長（深澤準弥君） 今、ご質問にあったとおり、体験ということで、やはり機械に触れるってことが大事になってくると思います。ただ、今回の学習指導要領につきましては、基本的には最初に教育長の方が答弁しましたとおり、考え方を学ぶということが重視されると思います。ただ、今後はですね、いわゆる、国の方も推奨している社会教育の部門で、そういう機会提供っていうのをして行かなければならないかと考えております。ですので、いわゆる子供だけでなく、高齢者の方に向けても生涯学習、社会教育の部門というのは、地方において大変重要な分野であると考えておりますので、そういったところで対応を検討していくという形で考えております。

○7番（高柳孝博君） プログラミングがなぜ必要かという、実は今後大学進学とか、就職活動とか、それから新しい仕事、新技術が入って来ますので、新技術に向かって適応していく選択の幅が、新技術が入ってくることによってなくなっていく業種もありますけれど、一方で新たに出て来る職種が出てくる。その職種に対して適応していくには、考え方を養成していくということですので、それをですね、他のところがやったから、その後で自分たちが講習へ行くとかそんなではなくて、松崎が先頭を切ってですね、松崎に行くとそういう体験ができる、松崎の子どもたちはそういう考え方が変わってきたということのを是非、先頭を切ってやって行きたいと思います。その決意をお願いします。

○教育委員会事務局長（深澤準弥君） 今議員がおっしゃるとおりだと思います。ただ、行政として、なかなか思い切ったことが出来ないところもありますので、現場と調整をしながらですね、実際にこれから人材が不足していくというのは国内何処でもあることですので、そういった技術者の育成っていう部分で国の方は、今そういうプログラミング教育なんかを学校教育の

中に組み込んでいます。そういったものも含めながら、できることを確実にやるような形で、なお且つ、今おっしゃったように、新しい情報については高いアンテナを持って、より一層、ICTができることによって、都市との格差を解消できるチャンスであるので、そういった方向で考えて行きたいと思います。

- 7番（高柳孝博君） 2018年に\*\*のアンケートで、高校1年生の8割がですね、パソコンタブレットを使った授業をやっていないと答えているわけですね。これは、OECDの中で最低らしいんですけど、是非そこを、松崎町が二の舞を踏まないように松崎町は凄いなよね、あそこは8割が、松崎町ほとんどのところで使ってるよというくらいに、是非お願いしたい。

それから実際、体験するってことになる、単純にいうと図書館なんかに端末を置いて、そういう書籍も増やす、そういったことで松崎町に行くと色々なものが見れるよという話が・・・それから、体験の話になって来ますと、今、小学生でもプログラムを組んでいる。それから、アルディーノですかね・・・電子工作をするパッケージが安く手に入っていて、簡単に組んで電子的な工作ができる。それらのことも実際に触らせてあげる。先端でやるための・・・子供は実際にいろいろな発想をしますから、大人が考える以上のものを作ってくれますから、子供が実際にプログラム作って既に世の中に出ている、そういう時代ですので、それから3Dプリンターなんかもそうですけれど、もう非常に安くなりました3Dプリンターもね。それらを体験させる、これはお金がかかるからすぐできませんけれど、小学生で例えばやるにおいては、マイクラフトとかスクラッチとかいうプログラミング・・・世の中にごまんと出ていますので、しかもそれは高くなくて、非常に安いコストで使えます。その当たりを是非、体験させていただく。今、周りがやっていないからチャンスなんです逆にね。周りがやってないからやらないじゃなくて、やっていないからチャンスなので、是非そこを考慮していただきたい。まあ、お金がかかります。これはお金は、アレですかね、町長に聞いていた方が良いでしょう。町長、ちょっと一言お願いします。

- 町長（長嶋精一君） お金の問題はあるんでしょうけれども、やはり、小さい子どもたちですね、可能性があるわけですから、その可能性を引っ張り出すのが教育であります。エデュケーションであります。引っ張り出す意味でも、やはり色々なことをですね、新しいのを教える必要があるのかなと思います。これについては、一変には変えれないと思いますけれども、教育委員長と局長ともよく相談しながらね、取り入れて行くべきものは取り入れて行きたいなと思います。

○7番（高柳孝博君）　すでに図書館に端末を置くとか、それから書籍を置くことについては、教育長さん精力的に動いて調べていただきまして、そこら辺可能性あるかってことをやっていますので、出来ないっていうのはなかなか難しいですけど、考えてですね、是非、どの町もできないと思う、どの町のスペースが・・・、余裕がある、余裕があるとか無駄でしたね、余裕があるわけではないですので、そこを今一步、どうしたらできるかを考えていただいて、是非実現していただきたいと思います。そこで体験できるということは、今後の町を本当に良くしていく、将来を考えると、凄く大事なことだと思いますので、そこは考えていただきたい。まあ、世に先駆けた先進性っていうのはですね、小さな町だからこそサプライズがあるわけですね。大きな町が、東京やった大阪やったっていうのは、これはあまり話題にならないですけど、東京に先駆けて松崎がやったらどうでしょうかね。これは本当にサプライズになるんじゃないかと思います。まあ、これは簡単ではありません。簡単ではないから全国の自治体やらないわけですよ。けど、そこをやった時に初めて・・・まあ、走るときに1番になれ1番になれっていうんですけど、走るだけが1番ではなくて、これからオリンピックもあるんですけど、オリンピックだけが競技ではなくて、実際にはプログラミングもやがて、今の\*\*の試験なんかも出てくるでしょう。出てきたときに、やっぱり松崎町は体験のところが無いから、成績が上がらないんだねっていうことではなくて、これから幸い、英語の部分も力を入れていくという話を聞いてますので、プログラムの中では英語っていうのは非常に重要になって来ます。そのあたりも力を入れて行かろうと聞いています。それから、AIはできていても人間しか出来ないこともあるわけですよ、その当たりコミュニケーションとかそういうこともありますけれど、これからはコミュニケーション自体もデジタルを使った、媒体としたコミュニケーションとかいうのが増えてきます。そういったときに、遅れをとらないように、子どもたちが・・・まあ色んな使い方・・・特にセキュリティーであるとか、色んな今、世の中でネットを使った犯罪っていうのはすごく出ていますので、その辺り。それから著作権の問題、その辺りをしっかりと伝えていく必要があると思います。時間がありませんので最後に、今後やって行きたい決意をお願いします。

○教育委員会事務局長（深澤準弥君）　はい、ありがとうございます。実はですね松崎町の中でプログラミング教室・・・実は既に地域おこし協力隊・・・企画観光課の者を中心にですね、実は小学生向けの教室、社会教育的なところでやっています。後は、大学の教授を退任されてきた方が松崎町内にもおられますので、そういった方々が今言ったような科学技術的な実験教室とか、そういったものをお願いしていますし、実は、中高一貫の関係で・・・高校の教員

で、科学の先生なんかを使ってですね、松崎の子どもたちに、そういう機会提供をしたりは、し始めています。先ほどもありましたとおり、偉人の関係も実は、今年度、歴史文化講座というのを開催しております、そちらで広く一般住民に対して講座も開催しております。そういった意味で、色んな形で実は少しずつ始めている現状があるものですから、それをより一層充実させてですね、松崎町の子どもたちがいわゆる、先ほど申し上げたとおり、教育格差の無い形で、教育できる環境を作っていけたらと思っています。実際に、松崎から出身で、大学を卒業して就職2・3年目の子でeスポーツの関係の業態に就職している子どもたちもいますので、そういった方々に、どういったものかというのを帰って来たときに、話をできるとか、先輩方の新しい職業についての講義なんかもできる環境でありますので、そういった方向で進めて行きたいと思っています。

○議長（藤井 要君） 以上で高柳孝博君の一般質問を終わります。

暫時休憩します。

（午前10時26分）

---